箱庭で異彩を放つ花　ローズ・レクチャー伝

undervermillion

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
箱庭で異彩を放つ花　ローズ・レクチャー伝

【Ｎコード】
Ｎ３２５９Ｘ

【作者名】
ｕｎｄｅｒｖｅｒｍｉｌｌｉｏｎ

【あらすじ】
「世界を震撼させた、あの大量失踪事件、通称「カオスコールド事件」。
あの事件を解決したローズ・レクチャーの伝記を、異世界チート作家である、私こと「斑鳩茂市」が余すことなく書き記すのだ。
売れないはずがあるまい」
「・・・。先生に、もう少し文才があればですが」

はじめに（前書き）

初めてのオリジナル長編です。
伝記物ですが、作者「斑鳩茂市」先生が当事者のひとりであるため、
いろいろと残念な事になっています。

ちなみに、「まえがき」シリーズとは違います。

はじめに

私がこちらの世界へ移動してから、何年経過しただろうか。
ああ、私のことなどどうでもよい話だった。
この、「まえがき」では、ふたつの事を説明しようと思う。

一つめは、この作品の主人公、ローズ・レクチャーのことである。
読み進めれば明らかになるが、彼が、あの「カオスコールド事件」を解決したことは事実である。
そちらの世界ではこれまで明らかにされなかったことだ。
事件が、皆が知るような解決をしたことによって、誰が解決したかと言うことは、それほど重要ではなくなったからだ。

事件を解決した本人にとっても、自分が解決したことを知ってもらおうとは思っていないはずだ。
何故なら、彼が望んであの事件を解決した訳ではなかったからだ。
彼にとって、あの事件の解決は、ついでのようなものだったからだ。

したがって、大勢の読者が知りたいと思う、何故、彼が事件を解決したのかは、彼の物語の中ではついでのようなものとなってしまう。
だが、最後まで読んでもらった読者なら、私の話す内容が理解してもらえると信じている。

そして、二つめは、この物語の構成についてである。

あの事件の事を話すのでれば、事件開始直後から話を進めても、本来ならば問題はないはずだ。
しかしながら、この物語は、ローズ・レクチャーの物語である。

そのため、事件よりかなり前の、彼が少年のころから話を進める必要がある。

もし、あの事件の経過が知りたいのであれば、第2部から読み始めてもらってもいいのだが、彼を取り巻く環境が理解できないため、結局第1部から読んでもらうことになるだろう。
読んでもらえれば、少年時代から話をしなければならない理由も理解してもらえると信じている。

とりあえず、私が「まえがき」で書くべき内容は、書いた。
後は、本文をお読みいただきたい。

第　1話　ルナスと呼ばれる世界には、魔法が存在していた。（前書き）

この話は、本文にもあるとおり、作品世界の背景です。
それほど長くは有りませんが飛ばしてもらってもかまいません。

第　1話　ルナスと呼ばれる世界には、魔法が存在していた。

この本を手にしている読者であれば、「カオスコールド事件」に関心を持っているだろうと考えている。
そのため、この事件が発生した舞台となった世界の背景についても、ほとんどの読者はご存じだと思う。

これからの文章はルナス世界を知らない読者や確認しておきたい読者以外は、読み飛ばしてもらって構わない。
特に、魔法学園中等部で「歴史」の講義をしっかり受けているならば、間違いなく不必要だろう。

この世界ルナスは、地球と異なるところに存在する。
この世界は、創造神ルナスが7日かけて作り出したと伝えられている。
ここら辺の話は、名前こそ違うが、地球の各地で伝えられている神話とあまり変わりない。
地球と大きく変わるのは、魔法の存在であった。

ルナスの世界では、魔法という存在が当たり前に使用されていた。
神が、世界を創造し、事象を改変するために用いた技であると。
その技は、人間にも伝承され、使用されていたが、やがて問題が発生する。

魔法使用者の、俗に言う「凶暴化」である。
魔法とは、事象を改変するために世界に存在する「魔素」を操作することで、事象を改変する。

その代償として、脳内神経に魔素の素粒子（原子を構成する素粒子とは異なる）通称「残骸」が蓄積することで脳に異常が発生する。
これが、「凶暴化」の原因である。

創造神は世界の枠外にいたため、魔素の影響を受けることは無かったと考えられているが、この世界に生じる人々にとっては、無視できない問題であった。
人間が使用する魔法が強大化するにつれ、戦乱が発生し、人類自体が絶望の危機を迎えた。
それを防いだのは、神の力であった。

神が行使した魔法「概念魔法」で、世界のシステムを改変したのである。
「概念魔法」により改変したのは、魔法の発動による残骸についてであった。
魔法行使後に残った残骸は、世界に拡散していった。
拡散した残骸は、地中に沈んでやがて元の魔素に戻っていく。
この概念魔法の行使以降、人類は絶望の淵からよみがえった。
しかし、神の存在は、この概念魔法「浄化」を境にして、歴史から姿を消すことになる。

概念魔法により、世界が平穏化するとともに、魔法は新たな時代を迎える。
制限無く使用することが可能となった魔法により、文明がかつて無いほど発展していった。
その一方で、人類に対して新たな脅威が産み出されていった。
魔物の発生である。

魔物の存在が最初に確認されたのは、概念魔法により、人類の凶暴化が収まってから約１００年が経過した頃であった。
中央大陸の最北部、溶けない雪で一年中覆われた地域から発見されたときは、始めから存在したと考えられていた。

しかし、やがて大陸各地に様々な魔物が登場することで、現実は異なったことが知られたとき、対魔物対策の魔法の研究が始まった。
研究の結果明らかになったのは、魔法の使用により地中に蓄積された残骸が魔素への還元に追いつく前に生物に摂取されたことで、魔物に変異したことが明らかになった。

多くの国々は、魔物を撃退することで問題は解決すると考えて、次々と攻撃魔法を開発しては魔物を退治していった。
なんとか、人類の生存圏を大陸内に確保したとき、新たな脅威が誕生した。
魔を統べる存在が、魔王の誕生である。

魔王が誕生した経過は、はっきりと知られている。
大陸北部の港湾都市モルスクで、魔法研究を行っていた女性がいた。
名前をアルヴァ・ウルクルターゼと呼ばれていた。

アルヴァは、他の魔法研究者達が、モンスターを退治するための方法論を研究していたのとは異なり、魔物の研究を中心に行っていた。
アルヴァの研究の結果、魔物は、概念魔法が発動される前の人類と同様に、脳内に魔素の残骸が集積されており、これが「概念魔法」が発動された証拠になった。
アルヴァはさらに研究を進め、どのようにして魔素の残骸が集まるのか、これらの魔物がどのような行動を行うのか、そして魔物を操ることが出来ないかという研究を進めていった。

アルヴァは、後に「暗黒魔法」と呼ばれることになる魔法体系を完成させ、魔を統べる存在、「魔王」となった。
アルヴァは、自分自身を普通の人間から、魔素の残骸で体を生成し、世界で魔法が使用され続ける限り自分が存在することが出来るよう、体を作り換え、不老不死の存在となった。

魔王となったアルヴァは、最初に魔物が発見された地域に城を建設し、魔物の国ネグザスを建国する。
ネグザス自体は、他国に攻め込むことをしなかったが、ネグザスを攻撃した国々に対して、城を壊し、国王を倒すことで、適度に戦乱を起こし、魔法を発生させ、さらに魔物を産み出していった。

この事態が１００年ほど続いた後、名もない賢者により新しい概念魔法「召喚」が開発される。
概念魔法「召喚」とは、異世界から「勇者」と呼ばれる存在を呼び寄せて、「魔王」を倒す存在となる魔法である。
魔法の発動には、１００人が毎日魔力をつぎ込み、1年でようやく発動する大がかりな内容である。

実際の魔法の行使は、国家規模でしか使用することが出来ない魔法である。
概念魔法で魔王を倒す存在として呼び寄せられるため、地球の一般的なＲＰＧのように、魔王は倒される。
異世界から召喚された者は、召喚元の世界では、普通の人間だったようだが、概念魔法により強力な力を身につけていた。

この概念魔法が、当時の魔法の水準を超越した技術で作られていたこと、この世界には、「他の世界」という概念が無かったことから、

この概念魔法も神が作ったものと、現在では考えられている。
証明することは、神が現れないことにはわからないのだが。

だが、アルヴァはしたたかであった。
アルヴァは、部下の１人に暗黒魔法を伝授させて「魔王」にしたて、自分を「大魔王」として「勇者」と「魔王」の様子を伺った。

やがて、概念魔法のとおり勇者が魔王を倒すと、アルヴァは召喚された勇者に「魔王を倒しても元の世界には戻れない」とそそのかし、勇者が召喚した国を滅ぼさせると、暗黒魔法の力を与えて、新しい「魔王」に就任させ、支配下に置いていた。

アルヴァは、元勇者が得た力を解析することで、自らの力にしていった。
そして、勇者が登場するたびに魔王が倒され、勇者が新しい魔王となるということが繰り返された。

変化が訪れたのは、１人の村娘が冒険者になったことがきっかけとなった。
村娘は、勇者にあこがれて冒険者となった。
旅の途中で、勇者が魔王を倒して新たな魔王となったことを知ると、魔法の研究に励み、新しい概念魔法「帰還」を産み出す。

新しい概念魔法「帰還」は、魔王となった勇者を元の世界に「帰還」させる魔法であり、この世界で得られた力を失わせることも可能だ。
魔王に対して行使した「帰還」より魔王はこの世界から消失し、アルヴァも概念魔法により消失した。
アルヴァの消失により、ネグザスも消失し、再び人類の脅威は消え

去った。

荒廃した大陸は、やがてクレルダン王国が統一し、魔物の存在は残るものの、ひとまず人類に再び平穏な時代が訪れた。
ここまでの混乱により、魔法の技術はかなり失われた。
魔法研究を再開するため、近年魔法学園が創設され、ようやく国を挙げての研究開発が進み始めた。
このような時期に、ローズ・レクチャーが登場した。

「先生（笑）、この内容は魔法学園中等部での講義録、「歴史について」を適当に切り貼りしていませんか？」

第1話の原稿を読み終わった私に対して、青い髪の優男風の青年が、ため息と共に感想を漏らす。
「第1話から剽窃とは情けないです」
先ほどの青年と同じような顔をしたもう1人の青年、こちらは長い髪を後ろで束ねていた、が悲しそうな表情で頷く。

「剽窃とは違う。ちゃんとしたオマージュだよ、インスパイヤだよ」
私は、ありのままの事実を述べ、剽窃疑惑を完全否定した。
私は、異世界チート作家だ。
この程度の誹謗中傷など、問題ない。

「では、巻末にちゃんと参考文献リストを添付してくださいね」
「あらかじめ著作権者の了解をとってくださいね」
「それと、引用した文献の使用料は印税からきちんと引き落としますからね」

「・・・」

私は青年達の指摘に謙虚に頷いていた。

第　2話　倒れていた子どもについて、村人は誰も知らなかった。

ローズ・レクチャーという人物の出生については、誰も知ることはできない。

彼の存在が、最初に知られたのは、クレルダン王国の西部地区にあるレナロダという村の前で、子どもが倒れているのを近くの村人が発見したことによる。
発見されたとき、子どもはこれまでの記憶を完全に失っていた。
結局、彼の記憶が取り戻されることはなかった。
このため、彼がいつ何処で産まれたのかは、彼の両親以外わからないのだが、今日まで彼の両親を名乗り出たものは存在しない。

子どもは、黒目黒髪をしていて、この地域ではあまりみられない特徴であったが、全く存在しないわけでもないので、村人達は不審に思わなかった。
村人達は、それよりも、なんとかこの子どもを助けようとして、倒れていた子どもを村長の屋敷に運んでいった。

子どもが村長の家に運ばれた理由は、子どもが見知らぬ存在だったので、人が集まりやすい場所で確認するためと、ここには簡易ではありながらも医療設備が整っていたからである。

村長は、運ばれてきた子どもの体を観察する。
村長は、かつて王都で学問を学んだこともあり、周囲から一目置かれる存在であった。
村長が子どもの体をじっくりと調べた。子どもの体は汚れていたが、大きなケガもなく、倒れていた原因は空腹によるものだと推測した。

子どもの状況を観察していた村長はとりあえず、子どもに食事を与えた。
とはいえ、子どもは気を失っていることから、果物を細かく砕いて飲み込みやすいように加工し、少しずつ口に入れる。
子どもは、翌日の朝には目を覚まし、夕方までには話が出来るほど回復していた。

子どもは、自分の状況を確認して、助けてくれた村人達に感謝した。
しかし、村長からこれまでの経過を問われると、しばらく考える様子を見せたが、結局「何も思い出せない」と答える事しかできなかった。

数日が経過し、子どもは歩くことが出来るほど体力が回復した。
村長に呼ばれた子どもは、改めて村長にお礼をいうと、なんとか雇ってくれないかと頭を下げて頼み込んだ。

村長は、子どもの年齢にふさわしくない態度に思わず驚愕した。
子どもは、自分を守るべき存在がいないことを理解し、自分が自分で稼いで生活しなければならないことを理解したのだ。
判断すべき材料である、これまでの経験を失った状態で。

村長は、反射的に子どもの願いを聞き届けた。
一方で、村長は子どもが大変高い教養があるのではないかと推測した。
そのため村人に、少年が発見された周辺を捜索するよう依頼し、少年の身元が明らかになるものがないか調査していた。
結局、子どもの身元がわかるものはなく、また子どもの足跡も付近の村とは関係のない森へ続く道の途中で切れてしまっていることから、どこから子どもが現れたのかわからなかった。

念のため村長は、徒歩で3日以上かかる付近の村々に少年の特徴を伝えた手紙を送り、調査をお願いしていた。
これも、結局徒労に終わった。
念のため、都に住む友人に、行方不明の子どもの噂が無かったか問い合わせたりもしたが、返事は返ってこなかった。

別に、私が無視した訳ではない。
締め切りに追われて忙しかったからだ。
現に、一年後、私は村長に話を聞くため、締め切りから逃れるように、この村を訪れている。

子どもは、自分の名前ですら忘れており、子どもを呼ぶときに不自由するという理由から、村長はローズ・レクチャーという名前を子どもに与えた。
子どもは喜んで頷いた。

村長は、ローズの扱いをどうするか悩んでいた。
結局、村長は自分の世話を行わせることにした。

ローズは、記憶や知識は欠けていたが、かなり頭が良いらしく、すぐに物事を吸収していった。
そして、わがままを何一つ言わず、村長の言うことに従っていた。

村長には娘がいた。
娘は7歳で、ローズと同じぐらいの年齢だと思われていた。
そして娘は、ローズよりは少し背が小さい。
ローズは、村長の娘に対して、村長と同じような態度で接していた。

ローズは、驚くべき事に、子どもながら自分の立場がわかっているようだ。

食事は、他の使用人と一緒にとり、寝室も使用人と同じ部屋で休んでいた。
この子どもは使用人の息子で、何かの事情でこの村にたどり着いたのでは無いかと、村長は推測するようになった。
賢くて、従順であるならば、今のままで問題はあるまい。
村長は、３ヶ月程度でそのような結論を下した。

村には、文字の読み書きを教える元冒険者がいた。
昔は、王国内を旅する冒険者であったが、引退して、子ども達に文字を教えることで生計をたてていた。

彼は、村長が王都で募集した。
冒険者は、基本的に若い間にしか勤まらない。
年を取った冒険者は、店を開くか、技術を教えるか、誰かに使えるか選択することになる。
一生悠々自適の生活ができる冒険者など、ほとんどいない。

村長は、娘と一緒にローズに読み書きを学ばせたのだが、半年ほどで元冒険者からお願いされた。
「自分と同じぐらい読み書きが出来るようになったので、ローズに教えることが無くなった」と。
村長は、ローズを呼び出して確認したところ、授業を受けるのにお金がかかるので早く覚えることが出来るように努力したと答えた。
村長はため息をついて、今後どうしたいのかを尋ねると、ローズはしばらく考えて、家の仕事がないときは、商売の勉強をしたいと答えた。

村長は村にある雑貨屋の主人と相談し、ローズに主人の手伝いをさせることにした。
村人は、ローズの事をかわった子どもだと思ったが、それ以上の事

は考えることはなかった。
すでに、村人の一員としてみなされていた。

そして、少年が村の入り口で倒れているのを発見してから一年後、
１人の少女がこの村に現れる。

第　3話　少女の装備は、この村を訪れるにしては、あまりにも軽装だった。

「呼ばれたのは、構わないけど、ちゃんといるのかな」
金色の長い髪の少女は、目の前の村を前にして一言つぶやくと、入り口の門をくぐっていった。
「こんにちは」
少女は、門に立つ武装した男から、声をかけられる。
「ああ」
少女は、片手を挙げて返事をする。

「見知らぬものだな、出身と名前を聞かせてもらおうか」
男は、手にした槍を少女の先に突き出す。
これから先を、通させないための牽制だ。
殺気は全く込められていない。

「セリエだ。ゼリンクラから来た」
「ゼリンクラか。村長の知り合いか？」
「いや、私の知り合いが、村長の友人らしい」
少女は、首にぶら下げていた、銀色の鎖を引き寄せると、小さな銀色のメダルが現れた。
「冒険者か」
男は、少女の周囲を改めて観察する。

男が少女の周辺を見渡しても、少女の周辺には誰もいないことに気がついて驚愕した。
モンスターが登場するこの世界では、一人旅というのは極めてまれな事である。
町の周辺で、弱いモンスターを倒したり、薬草を採取したりする程度であれば問題ないが、数日も一人旅を行うことは自殺行為だ。

普通であれば、馬車で移動したり、徒党を組んだりするものだ。
それは、戦闘に特化した冒険者であっても例外ではない。
普通の人間では通常、一定以上のモンスターには単独で勝てないのだ。
まあ、私のようなチート能力でもあれば、問題ないが。
・・・今は、私の事は置いておこう。

一年前に、倒れた少年が村の前で発見されたのは、本当に例外である。
いまだに少年が倒れていた理由は謎のままだった。
少女がひとりで、他の村から来られるはずもないと考えた男は、視線を少女の装備に移動した。

少女の武装は、腰にぶら下げた小さなナイフしか見つけることが出来なかった。
そして服装は、村人と同じような格好であった。
そして、少女が持っているのが小さな背負い袋だけであることを確認すると再度驚愕する。

旅をするには、少女の装備は軽装備すぎるのだ。
近所で買い物を行うくらいの装備品だ。
そして、服装は全く汚れていない。
数日でも旅をすれば、嫌でも汗のにおいが服につく。
毎日着替えをして、川でキチンと水浴びを行わない限り、臭いは取れない。
一体この少女は、何者なのだろう。
男の中で延々と続く、思考の迷宮を打ち破ったのは少女の声だった。

「通ってもいいかな」
「・・・。ああ、すまん」
男は、槍を上に上げると一礼して少女を見送った。
「何者なのだ、いったい・・・」

「先生（笑）は、まだですか？」
「ああ、先生（笑）はまだだ」
先ほど、村に入った少女とこの村の村長が、村長の屋敷の中で優雅にお茶を飲みながら、話をしていた。
村長は、普段は村の作業がしやすいよう、軽装で過ごしていた。
村長とはいえ、３００人ほどの小さな村だ。
自分自身が４０歳にならないこともあり、肉体労働に参加することもある。
だが、今日は客人対応ということもあり正装に着替えていた。
一方で少女は、先ほどまで身につけていた姿のままである。
ちょっとみただけでは、村の中で生活する他の少女達とあまりかわらない。
しかし、少女の優雅な姿勢と態度から、生じる感覚はどこかの貴族と変わらない存在感を示していた。
当然、歓談をするだけの状況なので、威圧感とかは現れない。

「・・・。巻き込まれましたか？」
「そうでしょうな」
２人とも笑いが出るのを抑えるように我慢していたが、
「くくく」
「ははは」
抑える事が出来なかったようだ。
「さすが、先生（笑）ですな」

「そうだな」

「楽しそうですね」
黒目黒髪の子どもが2人の前に現れると、「失礼します」と言いながら、お茶用のお菓子を差し出した。
質素だが、清潔感あふれる服装は、その年齢にかかわらず、きちんと家の手伝いを任されていることを示していた。
「ああ、そうだな」
村長はお菓子を受け取ると、子どもの質問に答える。
「共通の友人の悪口を言い合うことぐらい、楽しい事はないぞ」
村長は、少女に流し目を送ると、
「子どもには、悪影響だな」
少女もほほえみを返しながらお菓子を受け取る。
だが、2人ともしばらくは笑うのをやめなかった。

「村長には娘がいるとは聞いていましたが？」
少女は、村長に問いかける。
「こいつは、ちょうど一年前に倒れていたところを見つけてね、家の手伝いをさせている」
「ローズ・レクチャーです」
子どもはゆっくりと頭を下げる。
「セリエだ」

第　４話　目の前の存在が子どもとは、とても信じることができなかった。

「失礼ですが、セリエ様は冒険者ですか」
「ああ、そうだ」
少女は質問に答えると、子どもに視線を移す。
「君は何歳だ？」
「申し訳ありません」
子どもは先ほどよりも深く頭を下げると弁解する。
「とりあえず、８歳ということにしておりますが、正確なところはわかりません」
「ローズは、ここに来るまでの事を覚えていないのだよ」
村長は簡単に一年前の事を説明する。

「なるほどな」
セリエが話を聞き終わると頷いた。
「ローズよ」
「なんでございましょうか」
ローズは直立不動のままで、セリエの話をきいていた。
「どうして、私が冒険者だと思った」
「お一人で来られたからです」
ローズは即答した。

セリエは、意地の悪い笑顔で質問する。
「詳しい説明をしてもらっていいかい」
「少しばかりお時間をいただいてよろしいでしょうか」
ローズは、村長に了解を求めた。
村長は面白そうに許可をあたえる。
「ありがとうございます」

「この村の周辺には、モンスターが出現します。
ここ以外でも、同じように出現するとも伺ったことが有りますが。
通常であれば、十人以上で移動するところを、お一人でここまで来られたことを考えましたら、かなり腕の立つ冒険者であるとしか考えることができません」

「面白い、子どもだね」
セリエはつぶやくと、ローズに質問する。
「他の人たちが、別のところに行くとは考えないのかな」
「考えませんでした。
先ほどまで、道具屋の手伝いをしていたところ、ご主人様から呼び出しを受けました。
大勢で来られたら、道具屋が忙しくなることを、ご主人様は承知しております。
にもかかわらず、私を呼び出すのですから、少なくとも全員がご主人様のもとへ訪ねられたと考えました。
あとは、念のため村の子どもにお願いして、門番の人から確認をとりましたが」

「本当に、面白い子どもだね。
というよりも、本当に子どもなのかい」
セリエの目は笑ってはいなかった。
「よくわかりません。
この村に来るまでの私は何者であったか、いまだにわかりませんから。
ただ、今はローズ・レクチャーであると自信を持って言えます」

「そうか、済まなかったな」
「セリエ様、お気遣いは無用です。

同じ事を、ご主人様からも言われますから」
「・・・。そうだな」
村長は笑っていた。

「ところで、村長よ」
「なんだい、セリエ」
「頼みが有るのだが」
「先生（笑）が来るまで泊めさせてくれ、というのなら構わない。
いつものことだ」
私がこの村に来るのが遅れるのは、いつもの事ではない。
私がこの村を訪れるのはまだ、４回目なのだから。
「いつものことなのか。
まあ、先生（笑）の事ならば納得できる。
感謝する。
だが、私の頼みは別にある」
少女は、そばにいる子どもに視線を移す。
「興味を持ったので、しばらく預からせて欲しい」
村長は驚きの声を上げる。
「何だと！」
だが、すぐに表情を笑顔にすると
「そうか、そうか」
村長は１人納得の声を出す。
「ローズ、セリエの相手をして欲しい」
「・・・、かしこまりました」
ローズは、セリエと村長を交互に見ながら話を続ける。
「ただ、女性には慣れておりませんので、お気に召すかわかりません
んが」

「・・・」
「・・・」

村長とセリエはしばらく無言で、ローズを凝視すると、お互いの顔を眺めている。
「村長よ、貴様にそんな趣味があったとは知らなかった。いや、別に人に迷惑をかけないのであれば、双方合意の上であれば、問題はないが。
ただ、できれば、知りたくない話だったな」
「セリエ、何か勘違いをしていないか。
俺は、子どもをもてあそぶような趣味などない」
「知られたからといって、無理に否定しなくても構わないぞ。
村長とのつきあいを変えるつもりはない」
「勘違いするなと、いっている。
ローズとは、そんな関係ではない！
ローズ、お前からも何か言ってくれ」
村長は、怒りを抑えながら、ローズに話をうながす。

「誤解を招くような表現をしたのであれば、謝ります。
申し訳ございません。
誤解をまねいたのは、女性には慣れておりませんという言葉だったと思います。
私が申し上げたかったことは、この村にはセリエ様のような年齢の女性がおられないので、失礼な事を言ってしまうのではないかと、思ったからであります」

ローズの言葉に、言い合いをしていた2人は急に押し黙った。
「村長よ。
この子どもに、私の事を話したのか。
だから、私が冒険者であることを知っていたのではないか」
「それはない」
村長は即座に否定する。
「知っていたら、今のような失礼な事を言うはずがない。

だいたい、セリエが訪れたのは、今回が初めてだ」

「・・・。そうだな。
ああ、そうだな」
セリエは村長の指摘に納得する。
「セリエ様。
申し上げございません。気にさわるような事を言ってしまったようで」
子どもは深く頭をさげる。
「ローズよ、気にすることはない。
むしろ、興味がわいた。
しばらく私の話相手になってくれないか」
セリエは、ローズの目の前に右手を差し出す。
「かしこまりました、セリエ様」
ローズは、頭を下げながら、セリエの右手をしっかりと握りしめた。

第　5話　覚えた知識がいつ役に立つのかわからない。

「本当に君は、子どもなのかい」
「どのように思われてもかまいません。
それでも、私がローズ・レクチャーであることは変わりませんから」
「・・・。たしかにそうだ。
すまなかったね」
セリエは目の前の子どもにため息をついた。
子どもは今日何回目だろうと考えたはずだが、口に出すことはなかった。

ローズは、セリエから様々な質問を受ける。
普通であれば、８歳程度の子どもは冒険者の話を聞きたがるはずである。
セリエは、世界各地を回っているため、子どもからせがまれると冒険譚のひとつやふたつ語り聞かせていた。
子ども達は、冒険者にあこがれの視線を向けるが、セリエは決まって、冒険の厳しさを教える。

死の危険が高い冒険は、普通の人間では無理なのだ。
未来ある子ども達の命を無駄に散らせる訳にはいかない。
「家族を、友人を悲しませてはいけないよ」
セリエは、自分の考えをしっかり伝える。
だが、ローズはセリエにはほとんど質問はしなかった。
ローズが質問したのは、料理の好みとか、就寝時間や起床時間など、セリエが村長の屋敷の生活を快適に送ることが出来るための質問がほとんどだった。

セリエがローズに他に聞きたいことはと、話を振ると
「最近の村の周辺に出没するモンスターの傾向をお話ししますので、変化が無かったかどうか教えて下さい」であった。
セリエが、「どうしてそのような質問を？」とローズに尋ねると、ローズは、「警備隊の人々に説明するためです」と即答する。
この村の警備隊は、村から盗賊の進入を防いだり、薬草を採取する村人からモンスターの襲撃を守ったりしている。
村の子ども達があこがれる職業と言える。

セリエは次に、「警備隊になりたいの？」と質問すると、
「主人からのご命令が有れば」と即答する。
「なりたくないの？」と、意地悪に質問すると
「この体では、役に立ちませんから」とやんわり否定する。

「体を鍛えたらいいじゃないの？」
「この体で鍛えても、成長は期待できません。
それに、この年齢で体の動かしかたを定めても、応用が利かなくなりますから」
とすまして、答える。
「強いて言えば、攻撃をかわすための目を鍛えるために、攻撃を回避する訓練ならば受けたいですね」
と、言ってのける。

セリエは「なら、魔法の練習は？」としつこく食い下がる。
「魔法ですか。
見たことがないので、判断できかねます」
「役に立つわよ、いろいろと」
今度は、セリエが話し始めた。
「万能ではないけれど、傷を癒したり、モンスターを倒したりできるわよ」

「そうですか」
ローズは、しばらく考え込んでいた。
「確かに便利そうですが、自分自身がその能力を覚えるだけの価値があるかわかりませんね。
場合によっては、人にお願いした方が効率的なようですし」
「あなた、何者なの？」
「ローズ・レクチャーです」
「わかっているわよ」
「それならばよろしいのですが」
ため息をつきそうな表情だ。
だが、この子どもはそんなことはしない。
だからこそ、余計にセリエは腹を立てている。

「ともかく、魔法が使える可能性が高いかどうか確認してみよう」
「そうですね。
自分に何が出来るのかわかった方がいいでしょう。
ぜひお願いします」
「素直なのだけど、なにか腹が立つ」
セリエは頬をふくらませた。

「魔法の基本的な発動方法については、知っているかしら」
「詠唱魔法、動作魔法、媒体魔法ですね」
「知っているの？」
「勉強しましたから」
ローズは、そう話すと「魔法の基本について」に記載された内容を話し出す。
あの本は、魔法の知識がないものでも理解しやすいよう、私が物語形式にしたのだ。
この世界で最も売れた本の一つだ。

「関係ないエピソードが多すぎでしたね」
「合法的な、魔法使用による風呂ののぞきかたの話なんか、最低よね」
あのエピソードがなかったら、魔法の使用制限に関する法律や防御するための魔法の開発が、あそこまで革新的に発達はしなかったはずだ。
ちなみに、記載された内容のとおりに実行すると、現行法ではきちんと処罰される。
魔法が使用できるからといっても、よい子のみんなはまねをしないように。

「なら、魔法の勉強も不要ね」
「すいません。
勉強したというのは、文字の読み書きの方法です。
本に何が書かれているのかはわかりましたが、実践できるかどうかは別問題だと考えていますので」
「もう、わかったわ」
セリエはあきらめた口調をする。

「念のため、確認するけど、本当に魔法は使えないわよね」
「ええ、適切な導師がしなければ、魔法事故が発生したときに困りますから」
ローズは当然といった顔で答える。
「ローズなら、魔法が使えると言われても信じてしまうわ」
「私は、ふつうの村人ですよ」
「ふつうの村人が、そこまで理解できないわよ」
「うちの村の識字率を甘く見ていませんか」
「文字が読めることと、その内容を理解することは別の話よ」
「確かにそうですが」
「それとも、魔法の訓練よりも議論のほうがしたいのかしら」

「それもたのしそうですが、
優先順位としては魔法の習得が先のようですね」
「出発するわよ、ローズ」
セリエとローズは、村長の家を後にした。

第　6話　魔法の初歩について教わった。

「魔法の定義については、知っているわよね」
「魔素を用いて、事象を改変させる行為の事ですね」
「そのとおり」
ローズとセリエは草原のなかにいた。

「まあ、知識が十分に有るようなので問題なさそうね」
「私の身につけた知識が、正しいのかどうか、確証が持てません。ぜひご教授願います」
「話す内容が論理的に問題が無いだけに反論しづらいのだが・・・」
セリエは目の前の子どもを眺める。
どうみても、8歳程度だ。
目の前にいる子どもの外見が信じられなくなる。

「話し方がお気に召さないようですね。
あまり、慣れない口調なので、気が進みませんが。
せんせい。おねがいします」
ローズは突然、口調を見た目に合わせた内容に変えるとともに、ひょこりと頭を下げた。
「か、かわいい」
セリエが思わず口を滑らせると、
「だから、いやだったのに」
ローズは口をとがらせる。
「反則よ、それは」
セリエは思わずローズを抱きしめる。

が、一瞬で体をローズから離れる。
「教えていただけないようですので、口調を戻させて頂きます」

ローズは一礼するが、先ほどのお辞儀とは異なり、あくまでも業務上の礼節であった。

「教えるから、ちゃんと教えるから」
「お礼は、教えてもらってからにします」
「仕方ないわね」

「魔法の定義については理解しているようだが、魔素により事象を改変させるためには、どうすればいいか知っているの」
「改変式、通称サークルの生成ですね？」
「そのとうりだ」
「実際に生成したところを見たことがありません」

この村には、魔法を使える者がいなかった。
というよりも、魔法についての教育を受けることができる教育機関が限られているからだ。
この国には、国内の主要都市に一つずつ魔法学園が設置されている。

基本的な魔法について、中等部で学習することでようやく、魔法の基本と初等魔法を使用することが出来るのだ。
魔法学園に入学するためには、多額の資金が必要であるため、少なくともこの国での魔法使用率は少ない。
「そうよね。
では、教えてあげる」

目の前に、金色に光る三重の円とその中に二つの三角形が円に接した大きさで入っている。
日本では「ペンタグラム」「六芒星」と呼ばれている形状だ。
無論私は、こちらの世界では、別の言葉でこの形状を表現すること

を知っている。
しかしながら、人名や地名を除いて、こちらの世界での名称を用いる理由を私は見いだすことが出来ない。

「サークルと呼ばれる理由は、改変式の形状による」
セリエは説明を続けた。
「通常は、このサークルを見ることが出来ないけど、二つの方法で目視が可能となるわ」
「一つめが、表示魔法ですね」
ローズが答える。
「そのとおり。
この魔法は、純粋に表示のみを行う最低限の改変式で構成されている」

「頭の中で、構成する改変式をイメージし、体内の魔素を用いて改変式を具現化する。
具現化した改変式に魔素が満ちることで、改変式が発動し、魔法が行使されるのだ」

「もう一つは、探知魔法よ」
「目が」
ローズは、セリエの目を見ると、サークルと同様に金色に輝いていた。

「相手がどのような魔法を使用するのかがわかれば当然、対応しやすくなるわね」
ローズは頷く。
「とはいえ、今現在魔法使いを相手にすることはできないけどね」
「そうですね、ですので私が知りたいことは魔法の習得する方法と魔力の底上げ方法ですね」

「魔法を習得する方法については、キチンとした指導者で修行するしかないわね」
「教えてはもらえないのですね？」
ローズは残念そうに答える。

「そうね。
相手にするのは楽しそうだけど、本来の目的があるからね。
先生（笑）が来るまでは暇なのだけど」

「魔力の引き上げ方法なら、教えるのは簡単ね」
「それでしたら、ぜひ」
「一番簡単な方法は、日頃から魔力を行使する事ね。
一番簡単な改変式を教えるから、毎日使いなさい」
「お願いします」

「まずは、改変式の作り方を教えるわね。
これが出来たら、とりあえず魔法は使えるようになるわ」
セリエはローズの右手を握る。
「あなたの魔力を消費して、改変式を生成するわね」
やがて目の前に、最初に起動した改変式が現れた。
「今、改変式を発動したとき、頭の中に改変式と同じイメージが思い浮かんだ？」
ローズは頷いた。
「ならば、魔法を使用できる素質は有るようね」
ローズは笑顔を見せた。
セリエは思わずローズを抱きしめようとしたが、ローズがいつもの表情に戻ったので、慌てて話を続ける。
「そ、そうね。
さっきの感覚を思い出しながら頭の中で改変式を思い浮かべてみて」
セリエは、ローズの手を離すと、改変式の生成を促した。

再び、先ほどと同様の改変式が現れた。
「・・・。
すごいわね。
一度で、ここまで再現できるなんて」
セリエは感嘆の声を上げる。
「本当は使えたとか、言わないでよ」
「そんなことはありません」
ローズは、即座に否定する。
言葉を発するとすぐに、改変式は消失した。

「あとは、集中しなくても使用できるように努力してね」
「・・・。わかりました」
ローズは頷いた。

「まあ、実際には呪文によって発動できるように、頭の中に改変式を仕込んでおくのが一般的なのだけど。
魔法の構造をキチンと把握するためには、基礎を積むのが一番ね」
セリエは、訓練の続きを説明する。

「そして、魔力がついたら、改変式を大きくすると良いわ」
セリエは、先ほどの改変式と比べて直径が2倍の大きさの改変式を生成する。
「これくらいの大きさなら、本来は大気中の魔素を利用する改変式を組み込むほうが良いけど、練習だからね」
そう言って、改変式を消し去った。
「2倍になると、約8倍の魔力を消費するわね」
「直径が2倍なら、面積が4倍になるので、魔力消費は4倍になるのでは？」
ローズが指摘する。
「確かに、面積は4倍になるけど、伝導効率がだいたい半分になる

ので、８倍になるのよ」
「失礼しました」
ローズは素直に謝った。
「疑問に感じることはいいことよ」
セリエは機嫌良く答えると、
「じゃあ、今日の講義はここまでね」

「せんせい、ありがとうございました」
ローズは、ひょっこりと頭をさげる。
ローズは、セリエの願いを忘れていなかったようだ。
「だめ、かわいすぎる」
セリエはローズを後ろから抱きしめた。
「暑苦しいのですが」
「・・・。かわいくない奴だ」
セリエは、ローズから離れた。

第　7話　とても慕っているようには、思えなかった。

ローズ・レクチャーには、村の中でそれなりに慕われていたが、1人だけ嫌われていた相手がいた。
村長の娘である、レーナ・ミシュワートである。

厳つい岩のような顔をした父親とは異なり、澄んだ薄い青い目とふっくらした丸顔で、少し短めの前髪と、綺麗に長くそろえられた金髪の後ろ髪は、上品な貴族のお嬢様と比べても遜色は無かった。
村人達の噂では、母親がさぞかし美しかっただろうと言われているが、レーナの母親を見た者は誰もいなかった。

今の村長は、若いときに勉強のため王都に移住していたが、父親が病気に倒れたことを知り、王都を引き払って、父親の看病をし、まもなく死んだ父親の代わりに村長の仕事を引き継いだ。
父親の看病を行いながら行った仕事の内容が的確だったこと、温厚な性格であったとことが幸いし、誰も彼が村長になることを否定するものはいなかった。
そして、今の村長が王都から一緒につれてきたのが、当時2歳になったばかりのレーナであった。

レーナは、最初顔見知りで、父親の服のすそをいつも引っ張っていたが、村長の家人にかわいがられていくうちに、勝ち気な子どもに育っていった。
村人達が、驚いたのはレーナの賢さだった。
村に作られた、読み書きを教える教室に3歳のころから通いはじめて、5歳になるとひととおり本を読むことが出来るようになっていた。

村人達からは「レーナちゃんはえらいね」「村長に似て、賢いね」
と言われていた。

ローズが倒れたとき、レーナはローズの看病の手伝いもした。
ローズの体調が回復し、ローズが村長の家で働きたいと村長にお願いしたときも、何も言わなかった。

だが、村長がローズにいろいろ指示を与えて働かせるようになってから、レーナはローズの事を嫌いになった。
レーナにとって、ローズは父親を奪ったと思われたのだろう。
現にこれまで、レーナは簡単なお手伝いをしていたからだ。
ただ、ローズの仕事ぶりが大人の仕事と変わらなかったため、レーナが手伝っていたことは、レーナの為に作られた仕事だったと知ってしまった。

一方ローズは、同じ年頃であるレーナと遊ぶことが無かった。
レーナは一度、「遊ぼうよ」とローズを誘ったのだが、
「申し訳ありませんが、ただ今、村長からご用を承っております。お急ぎであれば、お父様から許可をもらってください」
と断られてしまった。

そして、ローズが読み書きを覚えるために半年ほど勉強したのだが、
「あの子に教えることはなくなった」
と、先生がため息をつき。
「あの子のおかげで、勘定を間違えることが無くなった」
と、店の主人が喜び。
「モンスターの生息域を図に表すという発想はなかった。
これで、安心して薬草を採取できる。
すぐにでも、警備隊で働いて欲しい」

と、警備隊長は村長に頼み込んでいた。

ローズは、それらの評判にも喜ぶことなく、いつものように村長の仕事を手伝っていた。
ローズの働きぶりは、子どもが成し遂げる内容を遙かに超えており異常とも考えられていた。
だが、本人が一切誇ることも、鼻にかけることも、自分を特別視することもなかったため、村人から反感を買うこともなかった。
レーナは、これまでの自分への賞賛が失われたことを悲しんでいたが、実際にはそれほどでもなかった。
逆にローズが異常だったことから、
「レーナちゃんくらいがちょうどいいよね」「レーナちゃんかわいいし、偉いね」
という発言に変わっていったが。

レーナは一度、ローズに文句を言ったことがある。
「ローズ、その話し方はやめなさい」
「お嬢様、私の話し方でお嬢様のお気に召さない内容がございましたでしょうか」
「もっと、子どもらしい話し方をしなさい」
「申し訳ございません、お嬢様。
私のこのしゃべり方につきましては、ご主人から許可をいただいております。
どうしてもとおっしゃるのでしたら、ご主人から許可をもらってください。
ただし、子どもらしい話し方とおっしゃっても、私が子どもである限り、自分では子どもらしいしゃべり方だと考えております」
ローズは、レーナに恭しく頭を下げる。

「いらいらする」

レーナは声を上げる。
「どうして、あなたはうちで働いているの！
あなたなら、商売を始めても、読み書きを教える仕事をしても、警備隊を手伝っても生活できるでしょう！」
ローズはレーナの驚きに驚愕していた。
「私がここで働くことが、お気に召さないと。
私の働きぶりにご不満が有るとおっしゃるのですね。
申し訳ございません。
差し使い無ければ、ご指摘頂けるとありがたいのですが。
そして、ご指摘にもかかわらず改善されないようでしたら、ご主人にご指摘下さい。
私は、ここで助けて頂いた恩を返すまではここで働くつもりでしたが、お役に立てないのであれば、この村を去るしかありません」
ローズはレーナに深々と頭を下げる。

今度は、レーナが驚く番であった。
「そうじゃないの。
そうじゃないの」
レーナは慌てて否定する。

ローズはいぶかしげに質問する。
「それでは、私の何が問題なのでしょうか？」
「あなたは、どうしてお父さんのもとで働きたいの。
別に、村の為に働くのなら、ここじゃなくてもかまわないはずよ」

ローズは再び驚きの顔を示すと、意を決したように話し始めた。
「ついに気付かれてしまいましたか。
どうやら、私の気持ちをごまかすことが出来ないようですね」
ローズはため息をついてから、話し始める。

「私は、お嬢様をお慕いしているのです」
「はい？」
レーナは驚きの声を上げた。
「私が村長の家で働き続ける限り、お嬢様とご一緒できます。
しかしながら、お嬢様に知られた以上、ご主人がお許しになるとは
思えません。
短い間でしたがお世話になりました」
ローズは再び深々と頭を下げる。
「お嬢様が助けてもらわなければ、私は意識を回復することはあり
ませんでした」
「わ、私は手伝いしかしてないわよ」
「私が意識を回復したとき、お嬢様がそばにおられました。
そして、お嬢様の姿を見たときに、私はお嬢様とお話をするために
生きようと決意したわけです。
もちろん、私の一方的な想いですから、無視して頂いて構いません」
ローズは、レーナの部屋から出ようとする。

「構うわよ！」
「お嬢様。
同情や憐憫なら不要です。
お嬢様の心を煩わしご迷惑をかけるつもりはありませんから」
レーナはローズの手を握って、引き留めた。
「命令です。
残りなさい」
「命令なら、ご主人以外から受けるつもりはありません」
「じゃあ、私が今からご主人よ」
「お断りします」
「私の事が好きじゃないの？」
「それとこれとは、話が違います」

「私が追い出した事になるのが、嫌なの」
「お嬢様のせいにはならないとおもいますが、いえ失礼しました。理由を話したらそう思われかねないと」
「そうよ」
「ならば、お嬢様が本気で追い出す気になるまで、お仕事をさせて頂きます」
ローズは再び頭を下げると部屋を出て行った。

「どうして、ご存じなのですか」
ローズは、目の前の少女に尋ねる。
「レーナちゃんから聞いたわよ」
「そうですか」
ローズはため息をついていた。
「1年以上も前の話ですし、今更、聞かれて困る話でも無いですし」
「ローズちゃんにも、かわいいところがあるのね」
ローズは、少女のからかいに再びため息をついた。

「私のことをどう思われても構いませんが、村人をからかうのであれば許しません」
「ほんと、ローズちゃんにもかわいいところがあったわね」
少女はいつまでも笑い続けていた。

第　8話　最初の出会いは、あっけないほど短いものだった。

私が、前回の話しに出なかったのは、私の出番が無かったのではなく、あえて出ないことで私の存在感の大きさを理解してもらおうと思ったのだ。

「先生（笑）、まもなく村に着きますよ」
考え事をしていた私に声をかけてくれたのは、青い髪をした優男風の男だ。
長い髪を後ろで束ねている。
「先生（笑）、何をわけのわからないことを言っているのですか」
もう1人、同じような顔をした青年も指摘する。
彼は、髪を後ろにかき上げながら答えた。
「まあ、いつものことですけどね。
先生（笑）にとっては」
青色の髪をした同じ顔をした男たちが笑っている。
優男風の風貌に騙されてはいけない。
彼らの性格はかなり良くない。

私は不躾な二人の会話を無視して、何のためにここに来たのかと、ここまで来るのに時間がかかってしまった理由について、回想してみた。

部屋の中央にある机の前で、青色の髪をした同じ顔をした二人の青年が、机に座っている、中年の黒髪黒目の小太りした男に詰問している。
「先生（笑）、早く原稿を仕上げてくださいよ」

詰問された男は、机の上にある、真っ白な紙を目の前にして、うんうんとうなりながら、
「わかっているさ」
と答えたが、青年たちは、全く納得していない。

オールバックの髪型をしている青年レフトスが指摘する。
「その割には、進んでいないようですが？」
「督促されると、進みが遅くなるのだよ」
男は平然と答える。
「いつもと変わらないようですが？」
今度は、長い髪を後ろでとめている方の青年ライトンが指摘する。
「それに、これまでより執筆期間が、６倍伸びたにも関わらず遅れるとはね」
次はレフトスは指摘する。
「うるさい。原稿料が入金されるまで、６倍も待つ必要ができたのだ。
そうなれば、仕事も６倍しなければならない。
結局、忙しさはこっちの世界でも変わらない」
男は苦悶の表情で答える。
「まあ、売れればいいのですけどね」
「そうですね。
まあ、先生（笑）のことですから」
「「期待していませんけどね」」
「同時に言うな」

男は重たい体を立ち上げると、扉に向かって歩き出す。
「先生（笑）、どこにいかれますか」
レフトスは指摘する。
「取材だよ、取材」
「もう、締め切りですよ」

「だからこそ、取材にいかなければならない。
理由がわかるか？」
「わかりません」
ライトンは首を横に振る。
「いつものように、男のロマンとか言わないでくださいね。
あのときのように、本当に残念な結末を迎えることになるのがオチですから」
男は、青年達の指摘に平然と答える。
「大丈夫だよ。
異世界チート能力を持つこの私に、不可能はない」
「巨人の腹の中に収まっていたくせに」
「原稿を仕上げる能力は、チートされていないくせに」
レフトス、ライトンは次々と否定する。
「うるさい、うるさい！」
男はいつのまにか、荷物をまとめていた。
男の書斎は片づいたことは一度も無いが、冒険の荷物だけは何故か一瞬で片づいてしまう。

「やっぱり旅に出るのですか？」
「ああ、久しぶりにあの男に会わないといけない」
「そうやって、王都から逃げるのですね？」
「ちゃんとした、理由がある」
「本当ですか？」
青年達はいぶかしむ。
「昔、あいつから手紙が来てな。
顔を出せと言ってきた」
「たしか、顔を出せではなくて、返事を出せだったと思います」
「それに、王都で誘拐事件や行方不明事件がなかったか調べてくれという内容だったはずですが」
「どうして、それを知っている！」

男は驚愕した。
「先生（笑）が締め切りで、忙しいので代わりに読み上げてくれと頼まれたはずですが」
「そうです。
先生（笑）の友人が少ないおかげで、手紙がほとんどこないのでいいですが、手紙を返さないと全く来なくなりますよ」
「だから、直接顔をだすのだ」
「はいはい」
レフトンは頷いた。
「無断で逃げ出すよりはましだ。
つきあうか」
2人の青年は両手を前に出してあきらめの表情をしながら、男の後に付いていった。

「旧友がどうしても来てくれと懇願されたので、原稿を仕上げた私は、まっすぐにこの村にたどり着いた」
私は回想を終えると、ありのままの真実を述べる。
「原稿はいっこうに進んでおりません。
先生（笑）、ねつ造はいけません」
「先生（笑）が、道に迷ったせいで、予想よりもずいぶん時間がかかりました。
ここも、先生（笑）が、嘘をついている部分ですね」
青年達が指摘する。
旅に出てから、彼らの指摘は回数を増やしていた。

「・・・。
想像部分ぐらい、好き勝手に作ってもいいだろう」
「原稿を仕上げてもらいましたら、一切文句は言いません」

「そうですね。
かなわぬ願いですけども」

「文句を言わないで、村に入るぞ」
「はいはい」
「ようやく着きましたね」
3人は、入り口の門をくぐり抜けていた。

私は、村長の家でくつろいでいた。
「お久しぶりです、先生（笑）」
「久しぶりだな。
たしか、・・・」
「ロキウスです」
村長はわざわざ名乗った。
私が村長の名前をど忘れしていると勘違いしているようだ。
失礼な。

「ロキウス、元気だったか」
「・・・。そうですな」
「はい、どうぞ」
黒目黒髪の子どもが私の前にお茶を差し出す。
「この子は」
「初めまして、ローズ・レクチャーです」
子どもは丁寧にお辞儀をした。
私は、自分の名前と職業を名乗ると、子どもは目を輝かせた。
「あの「魔法の基本について」を書かれた先生ですね。
著書を読ませていただきました」
「どうだい、私の実力を。
こんな片田舎でも、きちんと先生と呼んでくれる読者がいるのだぞ」

私は、周囲に自分の文才を見せつける。

「悪かったな、片田舎で。
嫌なら、帰ってもらって構わないぞ」
村長は、私を睨み付ける。
「すいません。
そんなつもりではなかったのですが」
「まあ、いつものお前らしいな」
「では、しばらくゆっくりしてもいいですか」
「残念だが、先客がいるのでね」
村長は視線を部屋の入り口に移動させる。
「待ちくたびれたわよ、先生（笑）」
視線の先には、セリエがいた。

第　9話　華麗なる我が冒険譚に、人々は驚嘆していた。

「先生（笑）、長旅お疲れ様でした。
いかがでしたかな、今回の旅は。
前回のように、巨人の腹で生活することが有りませんでしたか。
村人に、盗賊団の一味と間違えられて、追いかけ回されませんでしたか。
冒険者と間違えられて、いつの間にかモンスターと戦わされませんでしたか。
道に迷って、港町に着きませんでしたか。
そのまま、調子に乗って港で昼寝をしているうちに、乗組員と間違えられて乗船させられませんでしたか。
途中で、海賊に襲われそうになったときに、真っ先に泳げないにもかかわらず、海に飛び込みませんでしたか。
海賊に襲われた後で、嵐に巻き込まれたとき、1人だけ命綱をつけずに甲板に上がって、そのまま流されませんでしたか。
到着した、無人島で1ヶ月生活しませんでしたか」
セリエは、長々と話すと、私に挑むような視線で睨み付ける。

「どうやら、私の過去の冒険譚がねつ造されているようだね。
巨人が村を襲撃するのを避けるために、私のチート機能をいかして、生命の危機を顧みずに内部からの攻撃を行っただけだ。
私が、盗賊団に間違えられた時は、わざと逃げ出した先に本当の盗賊団のねぐらがあったので、盗賊団を壊滅することが出来た。
道に迷ったのは、ただの振りで、海洋ＳＦの構想を練るためのものだった。
船に乗船したのも同じ理由だ。
海賊に襲われたとき、真っ先に飛び込んだのは逃げ出すためではなく、海賊の注意を引きつけるためだった。

実際、海賊が俺を捕まえる間に、襲われた船は逃げていった。
私1人残してね！
嵐に巻き込まれた時には完全に遭難すると確信したから、いち早く退避したのだ。
現に、海賊船は渦に引き寄せられ海底に沈んだ。
だから、無人島で1ヶ月生活することなど、死ぬことに比べたらなんでもない」
私は論理的に否定した。

「ご安心下さい、セリエ様。
そのために、我々がいるのです。
今回の旅でも、先生（笑）が道に迷ったのはいつもの事ですし、回避不可能でしたので問題ありませんでした。
今回の最大の問題は、途中に立ち寄った村で、先生（笑）が何故か彫刻家と勘違いされたようで、村を守る女神像の作成を依頼されました。
先生（笑）が、根拠もない自信で、作品を作り始めると、恐ろしい邪神の像が完成し、邪神召還が危うく発動しそうになりました。
私たちが異変にいち早く気付いて、対応しなかったら、召還された破壊神に世界が滅ぼされたことでしょう」
青年の1人が、あきらめた表情で今回の旅を説明した。

「先生（笑）が、チート機能を生かして、妖艶すぎて、子どもには決して見せられない像をいやらしい表情と熱意で造られましたからね。
あの出来と情熱では、破壊の女神が召還されても誰も驚かなかったでしょう。
私が、先生（笑）が像を完成するまえに、像を破壊できたので問題なかったですが」
もう1人の青年も、ため息をついた。

「なんで、この世界に破壊神がいるのだよ。
おかしいだろう、常識的に考えて。
さすがに、世界が終わったら、異世界チート作家の私でも、さすがに人生終わっちゃうよ！」
私は思わず叫んでしまった。
「自業自得です」
「私たちを巻き込まないでください」
私の両側にいた青年達は、口々に俺を非難する。

「さすが、先生（笑）。
昔と、変わりませんな」
村長は、世界の滅亡の危機を聞いても平然としていた。
「というわけで、あなたが出歩くと厄災を振りまくのよ。
だから、これからつれて帰るわね」
セリエは宣言した。

「たのむ、1ヶ月いや2週間は滞在させてくれ。
ここで暮らせば、良い原稿を作れそうなのだ」
「以前も、別の村で同じ事を言って、世界を滅ぼすような素晴らしい像しか造りませんでしたが」
「その前は、混浴露天風呂に潜入だと息巻いていた割には、筆が進みませんでしたよ」
2人の青年は、私に過去の話を暴露する。

「ま、まさか、温泉が各家庭に引かれていて、誰も大浴場に来ないとは思わなかったのだ。
1ヶ月待っても、女性旅行者が現れないなんて、なんという拷問だ！」
「辺境の、強力なモンスターが出現する村に、何を期待しているの

ですか」
「女性旅行者を期待して何が悪い！
私が研究している、温泉と女性の素肌との因果関係の研究は、今後出版予定の「混浴露天風呂殺人事件　死ぬまでに一度は入りたい温泉ベスト5編」を完成させるのに必要なのだ」
「先生（笑）の原案では、殺された女性は全て入浴前に殺されていましたが」
「やめてくれ、それだけで犯人が誰かばれるではないか」
こんなところで、私の推理小説のネタ晴らしをされても困る。

「今すぐにでも、追い出したいのだが、君たちも疲れているだろう」
村長は一連の会話が終わったのを見計らって口を開くと、2人の青年に視線を移す。
「いつものことなので、慣れてはいますが」
「さすがに、破壊神召還の直前でしたので、像の影響によって集まった魔素に反応して強力なモンスター達が出現したので、撃退戦で疲労しましたね。
正直、あのときも疲れました」
青年達は、村長に感謝の念を送る。
「では、出発は3日後ということで、よろしいかな？」
「ありがとうございます」
「感謝します」
「私も、構わないわ」
青年2人と、セリエ頷いた。

「私の意見は、聞いてくれないのか」
私は、自分の意見が反映されないことに文句を言ったが、
「「聞きません」」
「無理です」
「よくも、まあぬけぬけと」

全員から否定された。

「決まったところで、夕食の準備が必要だな。
ローズ頼んだぞ」
「かしこまりました。
それでは皆様、失礼します」
ローズは、優雅に頭を下げると部屋を後にした。

「あの子どもは、お前の子か。
年齢にしては、随分とおちついているようだが。
それに、娘がいたのは聞いていたが、息子がいたとは聞いてないぞ？」
私は村長に指摘する。
「違う。
1年前に、村の前で倒れていた子どもを拾った」
村長は、答えてから、怪訝そうな顔を私に向ける。
「子どもがここに来るまでの記憶が戻らないと言うことで、先生（笑）に、最近行方不明になったり、誘拐されたりした子どもがいなかったか、手紙を出したのだが。
だからこそ、今日ここに来て何らかの話を聞かせてくれるものだと、期待していたのだが」

「そ、それは」
私が、適切な説明をする前に、2人の青年が口を挟む。
「先生（笑）は、締め切りに追われて、手紙を私に読ませました。
王都を出発する直前まで、思い出されることは有りませんでした」
「先生（笑）が、調査をされませんでしたので、僭越ながら私たちが当時の王都で誘拐事件や行方不明事件の発生が無かったか、確認を取りました。

該当するような、事件は発生していませんでした」
「そうか、ありがとう」
村長は2人の青年にお礼をいう。
「先生（笑）、詳しい話は食事中にきっちり聞かせてもらいます」

第　9話　華麗なる我が冒険譚に、人々は驚嘆していた。（後書き）

次回は、1月3日正午に更新の予定です。
次回で第1章は終了します。

第１０話　渡されたものには、想いが込められていた。

私が、村長の家を出発したのは、村長の予告通り、私が到着してから3日後の朝であった。
「朝早く出発することもないでしょう。
夕食をとってからでも構わないのではないですか」
私は、眠い目をこすりながら2人の青年に訴える。

「先生（笑）。
夕方から出発するなんて、ありえませんから」
「なら、せめて昼食をとってからでも」
私は妥協案を提示した。

「昼食を食べたら最後、夕食までごろ寝される人の発言とは思えませんね」
「朝食をとってすぐ、2度寝して、全く原稿が進まなかった先生（笑）の発言とは思えませんね」
「たぶん、昼食をたべたら、良いアイデアが浮かぶのだ」
私は、過去を振り返りながら2人に訴える。

「一度も、実現したことはありませんが」
「逃げ出すアイデアは、良いアイデアではありませんよ」
私は、青年達の説得に失敗した。
もう少し、こいつらにかわいげがあればいいのに。

私の心を読んだのか、
「先生（笑）、
私たちの代わりに、かわいい女性を秘書に置こうとは思わないでくださいね」

「以前、そのようにして、先生（笑）の別のやる気だけを引き出して、結局筆が進まなかったのですから」
などと、私を諌める。
さらに、私は青年達といつものやりとりをしている間、少し離れた場所で、ローズとセリエが話をしていた。

「短い間でしたが、ご指導ありがとうございました」
ローズは、魔法を始めとする様々な冒険に必要な技能の基礎を教えてもらったセリエに感謝の気持ちを込めて一礼した。
いつもの、礼との差異が見られなかった。
「どういたしまして、ローズちゃん」
「その呼び方は、止めてもらえると嬉しいのですが」
ローズは冷静に依頼する。

「あら、どうして？」
「体全体が、むずがゆくなる感じがします」
「失礼なことを言うわね」
「申し訳ございません」
ローズは再び、謝罪のための礼をする。
「その態度が無ければ、考えてもいいわよ」
「わかりました、あきらめます」
「随分、あきらめが早いわね」
「世の中に、かなわぬ願いが有ることを知っていますから」
「そうね」

セリエはしばらく考えていたが、
「それでも、やらなければならないときは、私は前に進むけど」
セリエはローズに顔を近づけて質問する。
「あなたは、どうなの」

「当然、私が私であるために、かなわぬと思っても、進むときがあります」
ローズは即答した。
「それが、どんなに苦しく、厳しい道のりでも」
「進みます」
ローズは誓いの言葉のように、しっかり言った。
「わかったわ」

セリエは、ローズの回答に満足そうに頷くと、左腕につけていた腕輪を取り外した。
「私は、かつては普通の村娘だった。
何も知らなかった私は、旅の人からこの腕輪をねだったわ。
旅人は、驚いた顔をしたけれど、お守りにくれたの。
「きちんと訓練すれば、腕輪はその力を果たすと」言って。
私はこの腕輪のおかげで、目的の一つを果たしたわ。
そして、もう一つの目的を果たすため旅を続けている。
あなたが、何を目指すのか今の私にはわからない。
でも、面白そうだからあなたにあげるわ。
あなたの役に立つことだけは保証するわ。
ただし、私の目的と反するのであれば、私はあなたを容赦なく、切り捨てる。
それだけは、覚えておいてね」
話し終えたセリエは、ローズの手に腕輪を手渡す。
「いただきます」
銀色に輝く腕輪は、少しだけ重量感を感じたが、装着したままでも動きは阻害されないようだ。

「どう、装着した感じは？」
「問題ないですね」

ローズは素直に感想を伝える。
「では、これでお別れね」
「ご教授、感謝します」
セリエは口をとがらせる。
「いつものように言ってよ」

ローズはため息をつく。
「いつもと言われるのは、納得いきませんが。
まあ、最後ですから」
ローズはにこやかな笑顔を作る。

「せんせい。またね～」
ローズは、両手を挙げて手を振りながら見送った。
「か、かわいい」
セリエは、ローズの背後に忍び込むと後ろから抱きしめ頭をなでなでし、やがてほおずりを始める。
「離してください」
ローズは体を左右に揺らすが、セリエは離すことはなかった。

「ふう、すっきりした」
「・・・」
セリエは満足そうな表情で微笑んだ。
「・・・。何かが汚された気分です」
ローズは絞り出すような声でつぶやいた。
「失礼なこと、言わないでよ。
ほおずりしたぐらいで」
「確かに、肉体的な被害は有りませんでしたが、精神的にしばらく立ち直ることが出来ない損害を受けました」
「こっちこそ、今の言葉で、損害を受けたわ」
ローズとセリエはお互いににらみ合っていた。

「どうやら、挨拶をすませたようですね」
私が、2人に話しかける。
「・・・」
「・・・」
別れを惜しむのか、2人とも黙ったままだ。
「あら、腕輪を」
私は、セリエが常に身につけていた腕輪がないこと、その腕輪がローズの左腕に有ることに気付いて驚愕の声を上げた。
「・・・」
セリエは顔を赤らめて、少し俯いている。

私は、セリエの態度の違和感に気付いたが、それについては口を出さなかった。
セリエの見た目は、少女そのものだったが、態度から見た目通りの年齢と取られたことはなかった。
そばにいるローズも同じように言われているが。
私は別のことをセリエに質問する。
「あの男のことは、あきらめるのか」
「ありえないわ！」
セリエは顔を赤くして否定する。
「だが、その腕輪がないと」
「言われなくてもわかっているわよ！
早く見つければ済むだけだから」
「わかったから、そんなに騒がないでくれ。
昨日の酒が残っているから、頭が痛くなる」
私は思わず頭を抑える。

「まったく、どれだけ飲んでいるのよ」
セリエはあきれた顔をした。

表情も、普段の顔つきに戻っていた。
「ローズちゃん」
セリエは再び、ローズに近づいて、視線をローズの高さに合わせる。
「・・・。
よろしかったのですか。
大切な腕輪なのに」
ローズはためらいながら口を開いた。
「大丈夫よ。
それよりも、一つ話します」
「なんでしょうか」
「その腕輪には、一つだけ魔法をかけています」
「魔法ですか」
「あまり役に立たないけど」
ローズは悪戯っぽく、一瞬だけ私の方へ視線を移すと話を続けた。
「本当にどうしようもなくなった時に、最後の手段として使って」
セリエはローズに魔法の言葉を伝えた。
「腕輪に向かって、今の言葉を使えば一度だけ発動するわ。
でも、最後の手段だからね」
セリエは、ローズの左手を両手に握って別れを告げた。

「さあ、帰るわよ」
セリエは、私と2人の青年と一緒に村を後にした。

第１０話　渡されたものには、想いが込められていた。（後書き）

第１章が終了しました。
評価していただきましたら幸いです。
次章は１月１４日頃に掲載予定です。

第　1話　手紙には、世の中の変化が記されていた。（前書き）

第2章も全十話の予定です。

第　1話　手紙には、世の中の変化が記されていた。

「先生、お元気でしょうか。
私は元気にしております。
本来であれば、友人の家人からの手紙など失礼だとは思いますが、セリエ様から「自分は冒険者なので、伝えたいことがあればこちらに送って欲しい」との事でしたので、村長のお許しをいただいた上で、お送りします。

皆様が、村を出てから2ヶ月が過ぎました。
先生のおっしゃったように、片田舎ですので、先生が来られた以上の騒ぎもなく、のんびりとした毎日を過ごしております。

とはいえ、私の身近では、いくつか変わったことが有りましたのでお知らせいたします。
先生は、あちこちから世界の情報を集めて作品を作っておられるとお伺いしましたので、話の種にしてもらえましたら幸いです。

一つめは、セリエ様からいただきました、腕輪についてであります。
私は、腕輪の能力以外に関心を持ちませんでしたが、住民の皆さんは腕輪の価値に高い関心をお持ちのようでした。

道具屋の主人が私の左腕にある腕輪を見たとたんに、買い取り交渉を始めましたし、普段は私に話しかけてくることなど無かった、年頃の娘さんたちから、譲ってくれないかと話しかけられました。
「村長のお客様から、肌身離さず装着しておくよう、依頼されましたので」と言って全てをお断りしましたが。

村長のお嬢様からは、物欲しそうな顔をされるだけで、一切腕輪について話しかけることはありませんでした。

二つめは、冒険者についてであります。
私がこの村に住むようになってから、セリエ様がお訪ねになるまで、一度も冒険者を見かけることはありませんでした。
しかし、セリエ様が帰られてから、頻繁にこの村に冒険者が訪れるようになりました。
冒険者たちの姿形は、私たちとあまり変わることが有りませんが、いくつか変わった言動をされます。

まずは、言葉使いであります。
冒険者の皆さんは、私たちと同じ言葉を使いますが、かなり間延びする感じがいたします。
こちらの言葉への反応は少し遅いようですが、しっかり聞き取っておられるので意志の疎通ができない訳ではありません。
たまに、聞き慣れない地名や食べ物の話をされますが、昔話にあった別の大陸から来られたのでしょうか。

つぎに、歩き方であります。
話し方は、ゆっくりであるのに比べて、移動速度はかなり速いです。
しかも、私たちにぶつかることが有りません。
しかもどんなに動いても少しも疲れる様子がありません。
どのような鍛え方をすれば、冒険者のみなさんのように動けるのでしょうか。

最後に、急な消失と出現であります。
冒険者の皆さんが、たまに目の前から消失することがあります。
冒険者のみなさんは「戻る」とか「寝る」とか言っておられること

から、転移魔法を行使されていると思いますが、解析できない以上、私には詳しいことはわかりません。
消失された皆さんは、しばらくすると消失した位置に再び出現されます。
再び出現するまでの間隔は人それぞれなので、別の魔法で出現されると推測しています。

冒険者の皆さんは、たまに警備隊の皆さんと一緒に、モンスターを退治されます。
私は、警備隊には入っていないため、直接見たわけではありませんが、変わった戦い方をされるようです。
攻撃速度は、警備隊の人よりも遅いのですが、命中率が高いため、警備隊の人たちよりも素早くモンスターを倒すようです。
冒険者の皆さんのおかげで、村の周辺にモンスターが現れることも少なくなりました。

変わったことは以上でありますが、村の雰囲気はそれほど変わってはおりません。
村長を始め、村の皆さんは、セリエ様が再びお訪ねになることを楽しみに待っております。
セリエ様にもよろしくお伝え下さいますようお願いします。

ローズ・レクチャー

以上です」

青年はたどたどしい筆跡の手紙を読み上げると、目の前の机で、一生懸命文字を書き殴っている、中年の男に声をかける。

「先生（笑）、あの村の子どもから来た手紙ですが、返事はどうしましょうか」
「先生（笑）、以前のように返事を書かないという選択肢は、止めた方がいいですよ。
世にも珍しい読者がまた1人、減ってしまいますから」
同じ顔をしたもう1人の青年が、笑いながら尋ねる。

話しかけられた男は、顔をあげると2人の青年に文句を言い出した。
「お前らは、もう少し年上に敬意を払いなさい」
「原稿が、期限内に完成すれば、いくらでも払いますよ」
「まあ、無理でしょうけど」
2人の青年はお互いの顔を見合って笑っている。
「見ていろ、この原稿が完成したら、驚きのあまり卒倒させてやる！」
「はいはい」
「期待しませんから」
私の書斎内には、2人の青年の笑い声がしばらく響いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3259x/

箱庭で異彩を放つ花　ローズ・レクチャー伝

2012年1月14日12時50分発行